

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：32633

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K11962

研究課題名(和文) リフレクションシートによる看護教育実践知の集積と統合

研究課題名(英文) Accumulation and Integration of Educational Knowledge in Nursing through Reflective Journals

研究代表者

奥 裕美 (OKU, Hiromi)

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・准教授

研究者番号：80439512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：看護基礎教育に関わる教員および、看護学生の実習、看護師の現任教育に関わる臨床看護師に対し、学習中心型の教育を実践するための基盤となる短期集中型教育プログラムを実施した。実施前後を比較して、学習効果を確認した。受講者には、受講後の教育実践の内容をリフレクションシートに記述することを依頼し、集積したシートの内容から看護教育実践における看護職の教育実践知を統合した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、学習者中心性の教授学習パラダイムを基盤に、主体的に考え判断できる看護職を育成する教育者の教育力を追及し、実装可能で長期的な効果も踏まえた教育プログラムを構築することにより、エビデンスのある看護教育実践につながる。その結果社会や、人々のニーズに応えることができる力のある看護職の育成に繋がると考えられる。

研究成果の概要(英文)：A short-term intensive education program about foundation for implementing learning-centered education, was being implemented to teachers who are involved in basic nursing education, and clinical nurses who are involved in nursing students' practicum and in-service training of nurses. Learning effects were compared before and after the program. Participants to the program were asked to write reflection sheets on their educational practices after the program, and the practical knowledge of the nursing education were integrated from the contents of the accumulated reflection sheets.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護教育 看護教員 学習者中心 現任教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1)看護系大学の増加と教員の「教える力」の育成の必要性の高まり

高齢化の進む先進諸国において、看護職への期待は高まる一方であり、わが国でも資質の高い看護職の養成を担うべく、看護系大学の数が急増してきた。そのような中、看護に限らず大学教員には教育実践の基盤となる教育学的知識や技術の学習が義務付けられてはいないため、「教える力」の育成が十分に行われてきたとはいえ、提供される教育の質保証については課題があった。そこで看護系大学の教員養成については、文部科学省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」が2011年に報告書を取りまとめ、今後の検討課題の一つとして、「教育の質保障において、最も重要な要素は教員の質的・量的充実であり、教育体制の充実に資する方策を多方面から検討していくことが必要である」と提言した。この提言を受け、将来看護系大学・大学院で教育・研究指導に携わる可能性の高い大学院の学生を対象に、教育力向上を目指した取り組みを支援することを目的に「看護系大学教員養成機能強化事業」が公募され、聖路加国際大学フューチャー・ナースファカルティ育成プログラム(以下FNFP)が採択された。FNFPは、質の高い看護教育を提供することが出来る人材を育成することを目的としたプログラムである。

### (2)教授学習パラダイムの世界的な転換 ～「教えるから学ぶへ」～

教授学習方法については世界的に「教えるから学ぶへ(from teaching to learning)」と呼ばれるパラダイムの転換が求められている。これは「知識は教員から伝達されるもの」という教授パラダイムから「学習は学生中心」、「学習を生み出すこと」、「知識は構成され、創造され、獲得されるもの」という学習パラダイムへの変換を特徴としている(溝上, 2014)。

わが国においても、大学で育成すべき「学士力」は「知識・理解」だけでなく、コミュニケーション・スキルや論理的思考力などの「汎用性技能」、自己管理能力、チームワーク、生涯学習力などの「態度・志向性」、そして、自らが課題を解決する能力である「統合的な学習経験と創造的思考力」を含むと平成20年に中央教育審議会が答申し、平成24年にはさらに、従来型の知識の伝達・注入を中心とした授業に変わり、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要であると提言している。看護においても同様に、看護教育プログラムは、研究によるエビデンス(根拠)に基づき、看護教育者として必要な様々な能力を持った教員によって提供されるべきであり、学生が主体的に参加するよう計画されねばならないと、提言されている(National League for Nursing, 2005)。

### (3) 学習者中心の教育を実践する教育力開発プログラム

前述したFNFP事業では、看護における学習者中心の教育を実践するために必要な知識、スキルの基盤を学ぶ研修会である「教育学セミナー(2日間)」、「TAワークショップ(2日間)」と、プログラム受講後に受講者が実際に行う教育実践を省察(リフレクション)するプロセスを支援する「教育活動メンタリング」の3段階の構成で行われていた。具体的には「教育学セミナー」、「TAワークショップ」は集合型の研修であり、受講者は実践的に学習者中心の教育を提供するための知識・技術を学習する。その後、受講者は2つの研修会で学んだ知識や技術を実際に活用して教育実践を行ない、その内容をリフレクションペーパーに記述する。リフレクションプロセスを活用し、自ら教育活動の改善をするという戦略であり、そのプロセスをメンター(講師)が支援する。先駆的に大学教員育成に取り組む、東京大学フューチャーファカルティプログラム(東大FFP)の協力を得て、教育者に共通して必要な知識と技術を学習する中に、看護学独自の要素を統合させたプログラムである。

#### (4)リフレクションシートの価値とプログラムの実装可能性

リフレクションシートに記述される看護教育実践の内容は、看護教育がどのような場面で、どのように実践され、教える側、そして学ぶ側にどのような影響を与えたのかという内容が書かれた看護教育の実践知であるが、これまで看護教育において実践知がこれまで十分に探究されてきたとは言えず、経験的に実践されていることが多い。そこで本研究によってリフレクションシートが集積、統合されることにより、看護教育に必要な知識基盤の構築や、根拠のある看護教育実践の探究に資する可能性があった。また、FNFP 事業は主に看護系大学の教員や教員を目指す大学院生を対象に行われており、医療機関等で学生や、新人看護師等の教育にあたる臨床看護師を含めたプログラムの実装が必要であった。

### 2．研究の目的

- (1)看護系大学、医療機関等で看護学生・看護師の教育に携わる看護教育者に対し、実践的な学習者中心の教授学習パラダイムに基づく教育プログラムを実装する。
- (2)看護教育実践の経験が記述されたリフレクションシートを収集し、看護教育実践知を統合する。

### 3．研究の方法

#### (1)教育力開発プログラム「看護を教えるを学ぶワークショップ」の計画と実施

聖路加国際大学 FNFP で構築した内容を基盤とした教育力開発プログラム「看護を教えるを学ぶワークショップ(以下WS)」を年1回開催した。看護学生、看護師の教育に携わる全国の看護職を対象とし、毎年20人を定員として募集した。学習効果を確認するために、WS前後の教育実践に関わる能力についての認識を比較した。

#### (2)看護教育実践知識の集積と統合

上記のWS参加者に対し、参加後の教育実践の省察と、その内容のリフレクションシートへの記述を依頼した。収集したリフレクションシートから、看護教育実践が生じる場の特徴や、教育者、学習者の状況、実践後の省察による看護教育者の認識の変化等を分析した。

なおすべての研究プロセスは、聖路加国際大学研究倫理審査委員会(承認番号16-A043)を得て実施した。

### 4．研究成果

#### (1)教育力開発プログラム「看護を教えるを学ぶワークショップ」

WSを1/年、計4回実施した(表1)。2016・2017年度は3日間、2018・2019年度は2日間で行った。参加者定員に対し充足率は35～55%、参加者の教育実践の現場は、臨床(31人、83.8%)が圧倒的に多かった。

(表1)

年度	日程	参加者	参加者内訳
2016年度	2016年09月03日(土) 2016年09月10日(土) 2016年09月11日(日)	7人	臨床看護教育者 7人
2017年度	2017年11月05日(日) 2017年11月19日(日) 2017年12月03日(日)	10人	臨床看護教育者 6人 看護系大学教員 3人 看護系大学院生 1人
2018年度	2019年02月16日(土) 2019年03月10日(日)	11人	臨床看護教育者 10人 看護系大学院生 1人
2019年度	2019年11月23日(土) 2019年12月15日(日)	9人	臨床看護教育者 8人 看護系大学教員 1人
合計		37人	臨床看護教育者 31人 看護系大学教員 4人 看護系大学院生 2人

#### WS実装に向けた実施方法の検討と調整

参加者の充足率が低迷したことについて、参加者にとって利便性のよい方法を検討し、実施方法を調整した。2016年当初、本WSへの参加者は看護系大学教員がメインになると考え、大学の夏季休暇中にあたる9月に設定した。しかし、参加者はすべて病院等で働く臨床看護教育者であり、シフト勤務である彼らにとって、同一月中の週末に3日間の休暇を獲得することは難しいことから、今後は少なくとも月をまたいだ日程を希望するという意見が寄せられた。そこで、2017年以降は実施日が2月にまたがるように設定した。しかし2017年度の参加者も微増にとどまったことから、2018年度以降は2日間で開催した。学習内容は変更せず、一部内容を事前学習として実施してもらうこと、終了時間の延長、休憩時間の短縮等により実現した。開催時期は、翌年度の就職や役割 臨床看護教育者の場合、翌年の新人看護師教育担当になるなど)が決定する、1~2月頃の開催を希望するという意見があったことから2月に開催した。2010年度は研究終了年度であったことから、WS後のリフレクションシートの提出のための時間を考慮し、11~12月に実施した。当初の予想よりも大学教員の参加が少なかった理由として、大学におけるFD活動の普及が進んだこと、週末にはオープンキャンパスや入試といったイベントが開催されることも多く、WS参加のための休暇をとることが難しいことなどが考えられた。一方、一部の臨床看護教育者にとって、集中的に看護教育に関する学習機会は少なく、同一医療機関から毎年複数の参加があるなど、ニーズがあることが分かった。

#### 教育に関する知識の取得と参加後の満足度

WS参加者教育実践に関わる能力についての認識を比較したところ、全ての回で全ての参加者が認識する力が受講後に向上していた。参加後のアンケートでは、「WSの継続を希望する」、「他者に紹介したい」といった意見が得られ、一定の満足度が得られたと考えられる。

#### (2) リフレクションシートの収集と看護教育実践知の統合

##### リフレクションシートの収集

4回のWS参加者に対して、リフレクションシートのひな型を渡し、印象的な教育実践があったときに記載し送付するよう依頼した。4年間で合計11通、14事例が得られた。WS参加者には、このリフレクションのプロセスが自らの教育活動の改善につながる重要な活動であることを伝え、年2回程度のシートの提出を依頼していたが、提出されたリフレクションシートの数は、予想以上に少なかった。この理由として、リフレクションシートのひな型が、学習者にとって使い

にくいものであったことを考え、参加者には記載例を提示するようにしたり、ひな型を使用せず、自分が省察しやすい書式で提出することも可能とするなど工夫した。特に参加者の多くを占めた臨床看護教育者にとって、臨床での教育実践後にリフレクションシートにまとめた量の文章を記述することが困難であったものと考えられる。また、本研究において個人情報保護を保持することは誓約していたものの、リフレクションシートには成功したとは言えない事例や個人の繊細な心の機微等が記述されることも多く、たった数日間の付き合いである研究者に対してそれを開示することに抵抗を感じるものもあったことが考えられる。

#### リフレクションシートに書かれた事例の状況と教育実践知識

リフレクションシートについては、事実が時系列に記載され、なぜそれが起きたのかについての記載者の考えを分析しまとめて最後にまとめて書かれたものや、自身の発言や行動の理由を行動・発言ごとに分析しているもの、事実だけが書かれ行動の分析が不足しているものなど、記述方法はもちろん、記述量や記述内容も提出者事に大きく異なっていた。教育実践の対象は、新人看護師を含めた記述者自身の同僚（後輩）が最も多く、教育実践に困難を感じた事例を記述した事例が多かった。具体的には、臨床判断のプロセスを支援したもの（3 事例）、働き方やキャリア構築に課題がある看護師の就業支援に関するもの（4 事例）、その他分析が難しい事例が 4 事例であった。また、研修会や講義における教育実践に関する事例は 2 事例、学習への動機付けに課題があると考えられている学生への支援に対する事例が 1 事例であった。看護教育者は、看護に関する知識や技術の学習を支援だけでなく、就業・就学全体の支援にも積極的に関わっており、困難を感じていることがわかった。

#### <引用文献>

溝上慎一（2014）アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換、東信堂  
National League for Nursing（2005）Transforming Nursing Education,  
<http://www.nln.org/docs/default-source/about/archived-position-statements/transforming052005.pdf?sfvrsn=6>（2020年6月15日閲覧）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松谷 美和子  (MATSUTANI Miwako)  (60103587)	国際医療福祉大学・成田看護学部・教授    (32206)	
研究分担者	三浦 友理子  (MIURA Yuriko)  (70709493)	聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教    (32633)	